

令和7年度研究プロジェクト計画概要

研究種別	■自主研究 13	公益目的事業 19
主査名	森本章倫 早稲田大学教授	
研究テーマ	交通未来都市にむけた長期的な将来予測と乖離に関する研究	
国連は世界の総人口の増加は鈍化しており、2024 年の最新の推計では 82 億人から 2080 年代半ばには 103 億人でピークに達すると報告している。2022 年時点での推計より、総人口のピーク時が早まり、総人口の予測値も下方修正され、その理由の一つは合計特殊出生率の変化とされる。また、人工知能（AI）の急速な発展にともない技術的特異点（シンギュラリティ）が着目を集めており、その時期が 2045 年と推測される一方で、多様な意見が提示されている。一般的に将来予測が外れる理由を予測の不確実性として捉えたと、J. Friend & A. Hickling (1987)は、以下の 3 つの不確実性の存在を指摘している。 ① 作業環境に関する不確実性（UE）：調査、分析、予測などにおける不確実性 ② 価値観に関する不確実性（UV）：政策、目的、優先順位などの不確実性 ③ 関連分野の意思決定に関する不確実性（UR）：連絡、交渉、協議などの不確実性 最初に示した科学の領域での不確実性のほか、政治に関連した領域や合意形成などの心理に係る領域までその幅は広い。本研究では未来の都市交通に係る長期予測に着目して、その予測の乖離がなぜ発生するのかについて検討を行う。特に人口、トリップ数などの都市や交通に係る基礎データの推計と、ICT や自動運転、メタバースなどの科学技術の推計の 2 つの視点から調査・分析を行う。 なお、研究のプロセスとしては主に以下の 3 つの段階で討議を行う。 (1) 都市交通に係る長期予測の事例収集 過去 100 年間に将来予測された交通に関わる事例を収集し、現時点からみた実現の度合について整理を行う。 (2) 長期予測のズレがなぜ発生したのかの原因分析 長期予測と現実の乖離について、不確実性の観点からその理由を考察するとともに、多様な視点で討議を行う。 (3) 2070 年の交通未来都市についての考察 長期予測が外れる理由をもとに、2070 年の交通未来都市についてシナリオ分析を行う。 研究の方法は、研究メンバーが所属する各研究機関においてテーマごとに研究を実施し、年に 5 回程度開催する研究会において、その成果を発表する。また研究会において自由討議を行うことで、研究者間の情報交流と相互連携を図る。なお、必要に応じてワーキンググループを形成して、個別テーマについて整理を行う。		